

隣人を愛せよ！

目次

隣人を愛せよ！

5

奇跡の続き

209

隣人を愛せよ！

優しい、真面目、いい人……

それは、私が時々言われる表向きの言葉。でも、知ってる。

平凡、地味、お人好し……そんな言葉と同じ意味だったこと——

六月下旬の関東地方。梅雨^{つゆ}のまつ最中だというのに、今日はいいい天気だった。日中の最高気温は三十度を超え、すっかり日が暮れた今もかなり蒸し暑い。今年も暑い夏になりそうな予感がして、うんざりする。

私、小川^{おがわ}香^{かおり}。

今日も一日、顔に笑みをはりつけて、お仕事頑張りました。ふう。地元の信用金庫に就職して、あつという間に四年。仕事に対して、どうにか小さな自信が生まれ始めたこの春、新人の遠藤^{えんどう}さんの教育係をおおせかつて——それから悪戦苦闘の日々が続いている。

今日も伝票の間違いを見つけちゃって……私としては、やんわりと指摘したつもりだったんだけど、彼女はすっかりむくれ顔。日付けを一日勘違いした——確かにそれは、遠藤さんの言うとおり、些細^{ささい}なミスなのかもしれない。でも、金融機関ではその手の間違いは許されない。ほんの小さなミスが、お客様の大きな損失に繋がることもあるから。

おだてたり、なだめたり、彼女にかける言葉をあれこれ工夫してみたけれど、感情がそのまま顔に出る遠藤さんの教育係は、難しく、へこむことが多い。

おしやれのセンスのなさを自覚している私とは違い、遠藤さんはファッションナブルで可愛らしい。つまり私とは全然違うタイプってこと。だから共通の話題もとぼしくて、教育係になって三か月近くが経った今も、私は彼女となかなか打ちとけることができずにいた。

そのうえ、ここ数か月の私のプライベートは——人生やめたい——って、一瞬とはいえ思っちゃったぐらい悲惨な日々。でも、彼女のおかげでそのつらさから目をそらすことができたのかもって、最近はいいい方に考えている。だって勤務中は、自分の仕事と遠藤さんのことで精一杯。余計なことを考えなくて済むのは、確かなんだもの。

夕食後、暑さと気苦労によってかいた汗をお風呂で洗い流して、やっとさっぱりした。洗いたての長い髪を一つにまとめ、スッピンにメガネでリラックスウェアに身を包むと、気苦労も忘れ、心底ほっとする。冷たい麦茶でも飲もうと、キッチンに足を向けたところで思い出す。

今日は金曜日だった！ 麦茶じゃなくてビールにしようっと。

二十七歳独身女の金曜の夜の楽しみがこれだなんて、ちょっとささやかすぎるかも。そう思いながら苦笑いを浮かべてリビングに入ったとたんに、母に声をかけられた。「香、久美子さんにトウモロコシ届けてきて」

そういえば、暑さでモワツとした空気の中にトウモロコシのおいがまじっている。

「今年の初物よ。久美子さん、トウモロコシ好きだからおすそ分け。ゆでたてよ」了解。ささやかな楽しみは、ちょっと後回しだ。

高橋久美子さんは我が家の西隣に住んでいるパワフルな女性。大きな体にカラフルな洋服をまとい、颯爽とお出かける姿は若々しく、もうすぐ還暦を迎えるようにには見えない。いつも元気で行動的。そんな久美子さんと一緒にいると、そのパワーを分けてもらえるような気がして、私は彼女のことが大好きだ。

トウモロコシをのせたザルを持ち、キッチンのドアから外に出る。家の中よりはましだけど、まだまだ暑いなあ。

わが家の庭には、フェンス代わりに生垣が植えられている。でも、お隣のキッチンのドアにつながる部分だけ、その生垣がポツカリと空いている。わが家のキッチンのドアを出て、庭を三十歩も歩けばそのまま高橋家のキッチンドア。そんなところからもわかるように、両家は昔から本当に仲が良い。

ちなみに、久美子さんは一人暮らし。留守がちだから心配だったけど、今日はキッチンの窓が明

る。よかった、久美子さんいるみたい。窓の明かりを眺め、私は小さく微笑んだ。

トントンとドアをノックする。

「久美子さん、こんばんは」

「はーい！」

元気な久美子さんの声。続いてドアが開くと、目の前には……

「ヒロツ！」

「よおっ」

久美子さんの息子、広輝が立っていた！

その顔を見ただけで——心が弱っていた今の私はほっとして……目が潤んできてしまう。

ダメダメ！ どん底から自力でここまで立ち直ったじゃないの！ 二十七歳はもう大人！ いいかげんに強くならんくちや！

私は、ちよつとうつむいて軽く目をつぶった後、無理やり笑みを作って、顔を上げた。

「——いつ……帰ってきたの？」

「五分前。おー、モロコシ！」

広輝は笑って私の手からザルを取り上げ、

「ほら。上がれよ」

と言つて、立てた親指をクイツと家の中に向けた。

ヒロこと、高橋広輝は、今は実家を離れて暮らしているが、久美子さんの息子で、たった一人の家族だ。広輝の父親は、彼が二歳の頃事故で亡くなっている。

広輝の父親が亡くなった後、久美子さんは再婚することなく、働きながら広輝を育てた。専業主婦だった私の母は、折に触れて久美子さんを手助けしていて、我が家で広輝をあずかることもしよっちゅうだった。

今と比べると子育てに対する支援が少なかった時代に、それは本当にありがたいことだったと、いつだったか久美子さんが言っていた。

私は、広輝が我が家にいるのが嬉しかったから、それが久美子さんにとってありがたいことではなかった——と、そんなふうに思った。

つまり、私と広輝の関係は、いわゆる『ただの』幼馴染。

同じ年の私たちは、小学校に入学してから高校を卒業するまでの十二年間、同じ学校に通った。

広輝が華やかなサッカー部で女子にキヤーキヤー騒がれていた時、私は家庭科部で地味〜に過ごしていた。

どうしてそんな絶滅危種みたいな部活に入ったのだった？

まず、運動が苦手なのが根本にある。それに他の文化部にしたって、美術部に入るには絵がへたすぎだし、吹奏楽部は練習が大変だったって噂だったし、情報処理部や囲碁将棋部なんて……真面目なメガネ男子ばかり。かといって運動部のマネージャーなんてキヤラじゃないし、ましてや広輝のいるサッカー部のマネージャーなんて……怖くてできなかった。

選択の余地なしで入った家庭科部は、和気あいあいとしていて楽しかった。今でも付き合いのある友人もできたし、地味だけどいい時代だったなあ……なんて思い出しては満足している。

部活のおかげで料理が好きになった私は、大学も食物栄養学科に進んだ。

そして、大学卒業後は、地元の信用金庫に就職し、今でもそこで働いている。

髪は今どき染めもせず、ストレートのロングを一つに縛り……さっぱりと。

——パソコンで目が疲れるので、コンタクトレンズはやめてメガネをかけ……信金職員らしく。

化粧はしなくて怒られるので、口紅と茶色のアイシャドウを、さっと塗って……一分で完了。そんなふうに高校、大学、社会人……とここまで人生を歩んできた。知り合いに久しぶりに会うと必ず言われるのは「変わらないね」の一言だ。

肩をたたかれて笑いながらそう言われると、複雑な気持ちになる。だって、それってほめ言葉じゃないよね？ だいたい、そう言った本人は、必ずキラキラしてるんだもん。それに対して私は「〇〇はキレイになったね〜」なんて言ってるあげろ。そうすると、キラキラ倍増の笑顔で、「やつだ〜」なんて言って、全身をクネクネツとさせる。特に男連れの時。私にはお世辞のひとつさえ返ってこない。

「変わらないね」という言葉も二十年も経つたらほめ言葉になるのかもしれないけど……でも、今度は笑って「老けたね〜」って肩をたたかれるんだよ、きつと。

ああ、二十七歳の私……なんて後ろ向き。最近たて続けに起きた諸々のせいで、ただでさえ少なかった自信をすっかり喪失して、平凡とか地味とか……そんな自己評価に、ネガティブっていう

のが加わってしまった。

「おう、うまそーだなあ」

さっそくトウモロコシに手を伸ばす広輝。

「嬉しいわあ！　ありがとね」

そう言つて、壁の時計を見て目を見開く久美子さん。あら、やっぱり今夜もお出かけ？

「——ああつ、もうこんな時間！　私は後でいただくね。——ヒロ、全部食べないでよ！　私は出かけるけど、香ちゃん、ヒロの相手してやつて」

そう言い残して、久美さんはあつという間に出て行ってしまった。

「久美子さん、今日は何？」

「んんっ……カラオケ……だつてさ」

トウモロコシを食べながら、モゴモゴと答える広輝。

「せつかくヒロが帰ってきたのに——久美さんつたら……」

つい非難めいたことを口にしてしまった。

とにかく元気な久美さんは付き合いが多くて忙しい。今は仕事はしていないけど、やれボランテアだ、旅行だ、カラオケだ……と、色々なサークルに入つて楽しそうにしている。

「ああ、いいんだよ。俺が急に来たんだし、元気だつてことはわかったから。それに、いつもは俺も離れて暮らしてるだろ。だから、こつちで付き合いがいっぱいあつたり、こうやつておまえが来

てくれるのを見ると、安心するよ。本当にありがとな」

確かに、私はよくこの家に来るんだけど、それは久美さんのことが好きだから。私が久美子さんに会いたくて来てるんだから、広輝がお礼を言う必要なんて全くない。でも、そんなふうに言われて、フワッと胸のあたりが温かくなった。こういう気分は久しぶり。さすが広輝。私を救うことにかけては昔から天才的だったなあ。

嬉しくなった私は、黙つたまま微笑んで広輝を見ていた。広輝はトウモロコシを食べながら笑つて言った。

「母さんも、金の心配がなくなったから、今までの分、残りの人生、楽しんでるんだろ」

そう——私の向かいに座つてトウモロコシを食べているこの男は、実はかなりの有名人で金持ちになつていたのだ。

私には二つ年上の兄、徹ととがいる。私の父は学生時代サッカーをやつていて、息子にもサッカーを教え込んでいた。我が家に入り浸つていた広輝も自然と一緒にボールを蹴るようになり、やがて二人はサッカーが大好きな少年になった。

いつも父と三人で何やらサッカーの話をし、テレビ中継を見ながらギャーとかウオーとか盛り上がつていたつけ。特にゴールが決まった瞬間のあのオタケビつて、騒音だよ……。地元の一チームの応援にもよく出かけていた。

小学三年生の時、広輝はスポーツ少年団のサッカー部に入った。当時は先に入団していた兄と同

じようなレベルだったけど、あつという間に上達し、中学時代には、すでに将来を有望視されるゴールキーパーとして県選抜選手になっていた。

高校は、県で一番サッカーのレベルが高い私立高校から入学のお誘いがあつたけど、自宅から近いほうがいいと言って、近所の公立高校に進学した。私の母校でもあるこの高校は、生徒の半分以上が大学に進学し、そのうち三分の一が国公立大学に合格するそこその進学校。広輝は、そんな進学校でもずっと上位の成績をキープしていた。

それでいて彼のサッカーのレベルは、県内トップクラスだった。大会では、入学を断った私立高校に惜しくも負けちゃったけどね。広輝は、部活に加えて県選抜チームでも鍛えられ、卒業後、そのままJリーガーになった。二年間Jリーグで活躍したのち、ドイツのプロチームに移籍。そこで五年ほど活躍して引退した。

日本を代表するサッカー選手になり、守護神なんて呼ばれていた広輝の引退を惜しむ声は多かった。だけど引退会見では「自分のサッカーはやりきった。次に向かって進みます」と、フラッシュを浴びながら、広輝はさわやかに笑った。

そして、日本に戻った彼は——青年実業家になっちゃったのだ。

毎日、朝から晩までサッカーに明け暮れていたくせに、高校時代、広輝はしっかりと英語とドイツ語をマスターしていた。さらにドイツでは、サッカーをしながら経営学でも学んだんじゃないだろうか。そう思わせるぐらい広輝の実業家としての活躍ぶりには目を見張るものがある。

日本に戻った広輝は、東京の郊外でスポーツクラブの経営を始めた。

ヒロスポートクラブと名付けられたそこは、広いプールや最新のマシンが並ぶジムエリアの他に、インドアのテニスやサッカーのコートもある。子供向けのスポーツスクールも開いていて、広輝のネームバリューから、特にサッカースクールは大人気だった。それに伴ってクラブ全体も成功し、広輝は見事にやり手経営者の仲間入りを果たした。今では都心にも進出し、そちらも順調のようだけど、まだまだ手を広げるつもりでいるみたい。けっこうな野心家。

「高橋広輝 ドイツで磨いたその手腕！ ヒロスポートクラブ 成功の秘訣!!」なんて記事が週刊誌に載るくらい、仕事における広輝の辣腕^{ちやくわん}ぶりはなかなかすごいらしい。

スポーツクラブの経営以外にも、テレビや雑誌でサッカーの解説をしたりと、いろんなメディアに登場するから忙しいだろうに、広輝は時間を作っては、頻繁に実家に帰ってくる。きっと一人暮らしの久美子さんが心配なんだよね。けっこう親孝行なの。

でも今回は久しぶり。二か月ぶりぐらいだろうか。帰って来るたびに、海外のお土産^{みやげ}や東京のおいしいものが我が家にも届く。

ほんと、広輝って、良くできた男だね。昔からずっとそうだった。

幼い頃の私にとって、広輝が家にいることは当たり前で、兄が二人いるみたいな感じだった。

同い年、しかも私のほうがひと月ほど誕生日が早いのに、まるで兄のような広輝。

幼い頃から広輝は賢くて冷静な男の子で、妹体質の私には頼れる存在だった。他の男の子のよう

に理由もないのに意地悪することもなく、私が困っている時はいつも助けてくれた。宿題を写させてくれる、なんて些細なことから、私に意地悪したり、キツイ態度をとる女の子をなだめることまで。

まあ、キツくあたられる原因の多くは、というか、ほとんどが広輝にあるんだから、責任を取ったってうだけかもしれないけど……

広輝は、頭の良さが顔立ちに表れている。それは誰もが頷くんじゃないかな。ちよつとキツめの目元にスツと鼻筋が通っていて、キーパーとしてゴールを守る時の眼光は鋭く、迫力に満ちている。それに、久美子さん譲りで体も大きい。しかも背が高いいだけじゃなくて、その胸板なんて……見ただけで頼りがいがあるって思っちゃうぐらい厚い。

簡単にいえば、サッカーがうんと上手な、頭の良い、涼しげな顔立ちのたくましいイケメン。

そんな男の子は、もちろん女の子からモテる。で、そういう男の子と、たとえば家が隣同士だかららつて親しくしていると、なんだかやつかまれちゃうんだよね……

私にキツくあたる女の子に、広輝はさりげなく、「家が隣同士だから、香は妹みたいなもん」なんて言つて安心させる。その上で、その子に「髪がきれい」だとか、「肌がきれい」だとか、「色が白い」だとか、「肌が小麦色で健康的」だとか言つてほめる。

私にはそんなこと言ってくれたことないのに……このタラシめく、なんて思ったこともあるほど。広輝と親しい私をやっかんていた子は、このホメ言葉でますます広輝を好きになつて——ありが

たいことに、私に優しくなる子もいた。

高校時代までの広輝は、全ての告白を「今はサッカーに打ち込みたいから」なんてセリフで断つていた。たとえそれが、学年一の美少女でも——

広輝つて、ものすごい女たらしなのか、それとも女嫌いなのか、その当時はわからなかったんだよね。でも本当のところは、サッカーと語学の勉強で忙しすぎて、カノジョができて、一緒にいる暇がないって思つてたんだつて。それを後から聞いた時、当時広輝を、女たらし——なんて密かに思つていたことを、心の中で謝つた。

いつの頃からか、そんな広輝を、私も好きになつていた。だつて、かつこよくて、いつも助けてくれる男の子を好きになるのつて、女の子だったら当たり前だよ。実際、実の兄よりも、ううん、それどころか父よりも頼りになるんだもの。

でもね、広輝の言葉どおり、自分のポジションが「妹みたいなもん」なことは、よくわかつていたから、親しい友人も含め、そんな自分の気持ちを誰にも言えなかった。もちろん、広輝本人になんて言えつこない。

私とは比較するのもオコガマシイような美少女が、広輝に告白して玉碎した——なんてウワサを聞けば、妹ポジションにいられるだけでも幸せて思つちゃうよね。変なこと口走つて、そのポジションすらなくしてしまうのは怖かつたし、それ以前に、変なことを口走れるほどの勇気も自信もなかつたし。だから、今まで広輝への思いは胸の奥にしまいこんできた。幸い、こんな私でもいいつて言ってくれる男の人めいたから、それなりに恋愛経験はある。だけど、広輝はやっぱり特別。

彼の一番になるうなんて大それた事は考えていないけど、ずっと変わらずにそばにいたい。

「ヒロ、いつまでいるの？」

広輝はあつという間にトウモロコシを一本食べ終えてしまった。

「とりあえず、この土日は休みとったから、いるつもり。まあ、適当に帰るよ」

「そっか。なら、ゆつくりできるね。——あつ、ねえ、この前のフランス大会、現地で解説してたよね？」

ふと、先日テレビで観たサッカーの試合を思い出す。生中継で放送は深夜だったけど、広輝の解説だもの、もちろんライブ中継で見えて、おかげで翌日は寝不足で仕事がつらかった。

「いいなあ……私ね、すつごくフランスに行ってみたいの。ねえ、観光とかできた？ ルーブル美術館とか行つたの？ 写真、撮ってない？」

たたみかけるように聞く私に、広輝は苦笑いしながら答えた。

「ギリギリのスケジュールだったから、どこも観光なんてできなかったよ」

そう言った後で、ん？ って、何か思い出したような顔をしてつぶやいた。

「だけど……待てよ、部屋に、前に行つた時の写真があつたなあ。見るか？」

「うん！」

広輝は立ち上がって冷蔵庫から缶ビールを二本取り出すと、テーブルの下に置いてあつたポストンバッグを手にとった。そのまま廊下に出て階段を上がる。私はウキウキと後に続いた。

二階の広輝の部屋は、窓が閉まっけていて蒸し暑かった。

「あつついな〜」とつぶやいて、広輝はエアコンのスイッチを入れ、私にビールを手渡す。そして自分のビールはローテーブルの上に置いて、写真を探し始めた。

私はベッドを背もたれにして床に座り込んだ。目の前のローテーブルにビールをのせてプルタブを開け、ビールを喉に流し込む。あゝ、よく冷えていて、おいしい！

そういえばこの部屋に入るのは久しぶり。高校生の頃までは、時々このテーブルで苦手の数学を教えてもらったなあ。懐かしいな。すつきりとたたづいた部屋の様子は、その頃のままだ。ビールを飲みながら壁に貼られた海外のサッカー選手のポスターを眺めていると、広輝がテーブルの上にアルバムを置いて私の隣に座り込んだ。

「ドイツにいた頃、フランスに遊びに行つたことがあつたんだ。有名な観光地には行つたと思うけどな」

私はさつそく、そのアルバムの表紙を開いた。

「ヒロ、ちよつと若いね。——わあ、この人、王子様みたいなイケメン！ これ、だれ？」

私は、広輝と一緒にこちらへ笑顔を向けている外国人を指さした。

「ドイツのチームメートだ。こいつ、スタメンじゃなかったけど、日本がすっぱー好きな日本オタクで、仲良かったんだ」

「つてことは、サッカーも上手いってことだね。金髪、碧眼、運動神経もよし！ いるんだねえ、こういうマンガに出てくるみたいな人」

ちよつと鼻息が荒くなつちやつたかな？ 広輝はあきれたような声を出した。

「こいつ、中身もマンガだぜ。こういうのがタイプか？ 今でも、連絡取ってるぞ、俺」

「私に限らず、ほとんどの日本の女の子は、こういう男の人ステキって言うと思うよ。私は、自分の身の程を知ってるから、こんなイケメンがタイプだなんて、言えませんけど！」

なんとなく恥ずかしくて、私は笑いながら答え、ページをめくった。

「——あつ、ムーラン・ルージュにも行ったんだ！ いいなあ」

「お前、結構くわしいなあ……」

フランスの有名なキャバレーの名前を挙げた私に、意外そうに広輝が言う。その時、写真の中のイケメンが着ているシャツの柄が目に残った。

「これ……このシャツの柄、鳥？」

「ん？ ああ、これか？ これは、アニメのキャラクターだよ。ほら、ゲームなんかにもなってる

『パケットモンスター』に出てくる……えーっと、何だっけ？」

「ああ、あれね！ そうか……シルエットだと、小鳥みたいで可愛いね」

「——あつ、そうだ！ ちよつと待ってる——」

いきなりそう声を上げた広輝は、ボストンバッグを引き寄せて中をこそごと探り始めた。どうしたんだろう？ っと思つて見ていると、やがて中から小さな細い包みを取り出す。

「——ほら、ちよつと遅れたけど、誕生日おめでとう」

そう言つて、広輝はその包みを私に差し出した。

「ええ！ 私の誕生日、覚えてたの？」

私は驚いて、つい大きな声を上げて広輝を見上げた。

「そりゃあな。子どもの頃、いつもおまえの家でケーキ食つてただろ。これな、この前のフランスで見かけて、おまえが好きそうだなあつて思つたんだよ。そろそろ誕生日だし、たまにはいいかなつて、買つて来たんだ」

「ありがとう！ 開けてもいい？」

広輝からの思いがけないプレゼント。私は嬉しさのあまり、はしゃいでしまった。

「もちろん。でもブランド物でもないぞ」

広輝は少し困つたように笑っている。可愛い包みの中から箱を取り出し、ふたを開けると……

「——わあ……ステキ！ さつすがヒロ。本当に私の好みぴつたりだよ！」

シルバーのネックレスだった。トップには、銀色の小枝の上で身を寄せ合うブルーの小鳥が二羽。「おまえ、昔っから鳥が好きだろ。なんだっけ……ほら、チルチルミチル？ あの話が好きだったよな。手提げバッグが鳥柄だったり、キーホルダーとかストラップとか、やたらと鳥が多かった」嬉しさにゆるんだままの私の顔を見ながら、広輝はちよつと得意げな顔をした。

「——それ、泊まったホテルの近所にあつた、ちっちゃい店のウィンドウに飾つてあつたんだ。向こうの作家の手作りだつてよ」

ブルーもシルバーも私の好きな色だし、何より鳥のモチーフが、私の好みにぴつたり！

「なんか、あまりにも可愛すぎて、もったいなくてつけられないかも……」

「そんなこと言わないで使ってくれ。——あつ、でも龍一には言うなよ」

広輝の口から出たその名前に、ドキリとして胸が苦しくなる。

「自分のカノジョが、他の男からもらったアクセサリーなんてつけてたら、やだろ？」
カノジョ……という言葉に、急に体が冷たくなったような気がした。

「俺、買う時には、香が好きそうだなあって、それしか思わなくてさ。アクセサリーはまずかったなって、後から思ったんだ。でも、俺からのプレゼントだって、言わなきゃいいよな？」

大喜びした私の様子を見たせい、か、広輝はくつたくな顔で笑っている。私はうつむいて、自嘲気味に笑って答えた。

「——ははっ……安心して。そんな心配、もういらなくなっちゃったから」

「なんで？」

広輝は怪訝けげんそうな表情を浮かべて軽く首をかしげている。仕方ない。私はため息をついてから重い口を開いた。

「……私、龍一と別れちゃった」

「いつ!? なんてだよ!」

大声を上げる広輝の顔を見ていられなくて、私はうつむいて小さな声で答えた。

「えっと……二か月ぐらい前に。——龍一、来月の二十日に結婚するんだよ」

「マジかよ!」

「……うん」

私はうつむいたままうなずいた。

「おまえと別れて、まだ二か月なんだろう? どの誰と結婚するってんだ!」

そう、私が龍一と別れて、まだたったの二か月。だけど本当に結婚するって言うんだから、いやになる。その上、相手は……

「すぐその、真紀と……」

「はあ!? なんだそりゃ!」

見上げると、広輝はひどく驚いた様子で目を見開いている。でも、すぐに鋭い眼差しで私を見つめ――

「俺に、ちゃんと説明しろ」

そう言つて、缶ビールのプルタブを開けた。

龍一と真紀、それから広輝と私。この四人はみな同い年で、小学校から高校まで同じ学校に通った同級生だ。

真紀の家はすぐ近所で、私と広輝の家からほんの二、三分の距離。私と真紀は女の子同士ということもあって、小学校に入学する前から仲良かった。

真紀は、女三人姉妹の真ん中で、姉がいるせい、か、小さい頃からおませさんだった。背が低くていかにも女の子って感じ。兄しくない私に、女の子に人気のキャラクターやマンガ、アイドルのことなんかを教えてくれた。真紀の家で、彼女の姉妹とおままごとやお人形で遊ぶのも楽しかった。

姉のようにふるまう真紀と、妹体質の私は、相性が良かったと思う。別々の大学に進んでからは会う頻度は減ったけど、私は彼女のことを親友だって思っていたし、周りからもそう思われていたんじゃないかな。

一方龍一は、私が勤める信用金庫の同期でもある。入社試験会場で声をかけられた時は、知っている顔がいてほっとしたのを覚えている。配属された支店は違っても、入社式や研修、同期の飲み会などで顔を合わせているうちに、自然と二人で話すことが多くなっていた。高校時代まではただの同級生であまり話をしたことがなかったけど、思い出を共有しているせいか、話がはずんだ。そして、入社から半年ほどたった頃、

「俺、小川みたいなタイプと付き合ったことないけど、癒し系でけっこう好きかも」

龍一のそんな告白で、私たちは付き合い始めた。それはこの春まで続いていたのに……

広輝は喉を反らしてビールを飲んだ後、続きをうながすように黙って私を見つめている。忘れたいと思いつながらも決して忘れられない出来事を、私はポツポツと話し始めた。

「——えっとね、真紀はね、同じ会社の年下君と付き合ってたの。でもね、うまくいってなくて、それを相談したいって言われたんだ。『男心が知りたいから龍一も連れて来て』って言われて……だから、三人で飲む約束したの」

あの日、真紀からかかってきた電話を思い出す。その後に起こる悲劇も知らず、私は本気で友達の恋愛相談にのるつもりだった。

「それ、いつの話だ？」

広輝の質問に、私は「二月」って答えた。

「でもね、その日に限って、……私、定時で帰れなかったの。残業の途中で真紀にメールしたら、『龍一に話聞いてもらってるから、遅くなるなら無理しなくていいよ』って。結局仕事が終わったのも遅かったし、疲れてたから帰ったんだけど……」

いやな話はさっさと済ませたい。私は残りのビールを飲み干して、一息に早口で言った。

「その夜、二人は酔った勢いでやっちゃって、子どもがデキたの」

それを聞いた広輝は、ため息をつき、目をふせてポツリとつぶやいた。

「……デキ婚かよ……龍一と真紀が……」

そして、ふと何かを思いついたように、私を見た。

「——ちょっと待て。真紀の子は年下君の子っていう可能性もあるだろ？」

以前の私も、その可能性にすがりついた。でも、それは簡単にうち砕かれた。

「真紀、会社の人間関係で色々あって——結婚して会社辞めたいって、自分から年下君に迫ったんだって。彼は、考えるって言ったらしいけど、それから冷たくなって、今年に入ってからエッチもなくなったって言った。飲みに行ったのが二月だから、やっぱり龍一の子だと思っよ」

「結婚を迫られて、男の方が冷めたのか……」

広輝はため息をついた後、私を気づかうように優しい声で言った。

「俺さ、さっき、下でおまえを見た時、やせたなって思ったんだけど、やっぱりそのせいか？」

「そりやあねえ。さすがにショックで……。食欲がないなんて、生まれて初めての経験だったよ。でも、そのおかげでダイエットできたから、少しはいいこともあったかな」

「何言ってるんだよ。もともとダイエットなんか必要ないだろ？」

私が無理して軽く笑うと、広輝は一瞬語気を荒くしたけれど、すぐにまた気づかうような声に戻った。

「それで、おばさんとか……うちの母さんとか、このこと知ってるんだよね？ 何て言ってるんだ？」

私は広輝を見てうなずいた。

「お母さんも久美子さんも怒ってたけど……私と龍一は結婚してたわけじゃないからね。不倫じゃないし。まあ、恋愛でも浮気はだめなんだけど……子どもがデキちゃったら、負けだよ」

久美子さんが涙ぐみながら、「絶対にもっといい男が現れるから」って、なぐさめてくれたことを思い出す。

「相手は真紀だし、向こうのお母さんが困ってるのも知ってるし、とにかく赤ちゃんがいるんだもん。みんなだって、強くは言えないよね。もうこの話は禁忌^{タブー}みたいな感じ」

仕方がないことだ。そう思ってる。私は小さく笑って見せた。

「それで……おまえは大丈夫なのか？」

広輝はひどく心配そうな表情を浮かべて、私の顔を見ている。心配させないように、大丈夫だと思ってもらえるように、明るい声でしっかりと返事をした。

「うん。考えてもつらいだけだから、考えないようにしてる。会社には秘密にしてたから、そこは大丈夫だし。それに最近ね、私と龍一は、最初から合わなかったっていう気もしてるんだ。本当は、真紀みたいなコが龍一のタイプなんだよ」

言い訳するようにそこまで言っただけで、情けなくなってきた。自分がもっとキレイだったら、せめて、もっとおしゃれだったら、こんなことにならなかったかもしれない。私はつい弱音を吐くように、言葉を続けてしまった。

「もともと、私は龍一のタイプじゃなかったんだよ。龍一は、もっと華やかでおしゃれなコが好きだったの。もっと化粧しろとか、もっとセンスのいい服着ろとか、そんな感じのこと色々言われてたもん。だけど私、どうしていいかわかんなくて……龍一の言うとおりにできなかったの。——あ、でもね、今はもうだいふ落ち着いてきたよ。——後は、披露宴^{ひらうえん}さえのりきれば大丈夫。ほんととは行くのいやなんだけど」

「はあ？ おまえ、披露宴に行くつもりなのか!？」

広輝が驚いて身を乗り出し、私の顔を覗き込む。そうだよ、やつぱ、そう思うよね……

「うん。真紀だけじゃなくて、真紀のお母さんにも謝られて、お願いされちゃったの。仲良しの私が披露宴にいなかったら、みんなが色々思うから、出てほしいって。それと、龍一は私と別れてから真紀と付き合い始めたって、みんなに言っただけじゃないんだって」

「なんだと？ ……なんて自分勝手なヤツらなんだ!」

広輝の声に怒りがにじんでいる。

「でもね、私、思ったの。もし、私が披露宴に行かなかったら、きつとみんな、今回のことを好き勝手言うよね。けっこうひどい話だし。だから、少しでも噂話が減るように、もう平気って顔して行ってこようかなって思うんだけど……」

眉間にシワをよせて目を閉じる広輝は、何も言ってくれない。

「さすがに余興もスピーチも頼まれなかったし、ずっと黙って座っていればいいだけだから」

そこまで話して、私は口をつぐんだ。

誰かに聞いてみたかったけど、誰にも聞けなかったこと。それを私は思い切って広輝に尋ねてみた。

「でもね、私がいたら、みんな話にくいよね？ 私だったら……噂とか聞いてたら、そんなコに話しかけられないもん。ねえ、ヒロはどう思う？」

「——つとに無神経な奴らだな！ 披露宴なんかしないで、籍だけ入れればいいだろうに！」

閉じていた目を開き、広輝は怒りをあらわにした。広輝が怒ると怖い。私は、つい真紀をかばってしまった。

「真紀ね、結婚する時、友達をたくさん呼ぶのが夢だったの。私、何度も未来の結婚式の計画、聞かされたこともあるもん。着物もドレスも着たいってね。希望どおりにするために、安定期に入ってから披露宴するんだって。私がするとも言えないでしょ？ ……それに、普通、結婚式って一生に一度のことだから、悔いのないようにしたほうがいいんじゃないかなって思うんだ」

「まったく、おまえってヤツは！ ——お人好しにもほどがあるなあ……」

あきれたように私を眺めた後、広輝は黙り込んだ。腕を組んで何やら考え込んでいる。しばしの沈黙の後——

「よし！ その披露宴、俺も行く。いいよな？」

思いもよらない言葉に耳を疑う。

「ええっ！ ヒロが？ 真紀たちの披露宴に？」

「来月だろ？ 来月は海外に行く予定もないし、日本にいるなら予定なんかどうにでもなる。龍一の携帯の番号、教えろ」

突然の広輝の発言に戸惑いつつも、まだ忘れていない龍一の携帯電話の番号を告げる。まったくためらうことなく、電話をかける広輝。

「もしもし。龍一？ 俺、高橋広輝。わかるか？ ——え？ 本物に決まってるんだろ。ずっと同じ学校だったんだから、声ぐらいわかるだろ。——おまえ、結婚するんだってな。それでな、俺も披露宴に呼んでくれよ。——知ってるよ。来月の二十日だろ？ 香に聞いた。相手が真紀だったことには驚いたけどな。——ああ、そういうのはもういいよ。だいたいのは香から聞いたし」

すぐ隣に座る広輝の携帯電話から、かすかにもれてくる龍一の声。彼の声を聞くのは、「話があの……」で始まった、あの別れの電話以来だ。

携帯電話を通して変なふうに響く龍一の声を聞いても、懐かしさも——愛おしさもない。ただ嫌悪を感じて耳をふさぎたくなる。

「——そっか！ 行ってもいいか。ありがとう。それでな、一つ頼みがあるんだけど、俺の席は香の隣にしてくれ。——そう、同じテーブルの隣同士だ。——そんなのどうにでもなるだろ？ 男友達の最後が俺で、女友達の先頭を香にするとかさあ。隅っこでもどこでもいいから。頼んだぞ。——いや、スピーチとかそういうのはやらないから。——おまえ、香の気持ちを考えたことがあるのか？ 披露宴の間、俺がずっと香の隣にいてやるんだよ。おまえ、ひどいことしたんだからそれぐらいのことしろよ。——ああ、招待状は実家に送ってくれ。——番地？ 香の家は知ってるだろ。香んちが二百十番地で俺んちが二百十一番地だよ。——ああ、そういうことでよろしく」

電話を切った広輝は、力強い眼差しで私をまっすぐに見て言った。

「披露宴の間中、つか、行くところから家に帰るまで、俺がずっと一緒にいてやる」

その言葉を聞いたとたん、顔がゆがんで、涙があふれてくる。

「……ヒロ、ありがとう。私、本当に披露宴に行くのいやだった……いやでいやでたまなかったけど我慢しようって……。でもヒロと一緒になら、みんなに何言われても、誰とも話さなくても、ヒロがいてくれるなら……大丈夫。あゝ、ほっとしたあ」

ずっと胸の奥に溜まっていた本当の気持ちを言葉にしているうちに、涙がぼろぼろとこぼれたけれど、最後は広輝に笑いかけることができた。この涙は、このところ続いた苦しい涙じゃなくて、思いがけない広輝の優しさに対する嬉しさと安堵と——そんな気持ちが入り交じった涙。

止まらない涙を手の甲でぬぐいながら、私は何度も広輝にお礼を言った。隣に座った広輝が、そんな私をふわっと抱きしめた。そして、大丈夫とでも言うように、大きな手が私の頭を優しくなで

る。突然の出来事に驚いてドキッとしたが、その胸に頭を預けていると、気持ちが安らかになって涙も少しずつ止まっていった。

こうしていると思いつく。幼い頃、私が泣いていると、広輝はいつも「ヨシヨシ」って言いながら、私の頭をなでてくれた——

しばらくすると広輝が、腕の中にいる私のメガネをはずし、ティッシュで涙をふいてくれた。そして、鼻をすすっている私に向かって「ほら、鼻かめ」とティッシュを差し出す。

私は広輝の腕の中から抜け出して、素直に鼻をかんだ。

「ほんと〜にありがとう。気が楽になった。それに今年の誕生日は史上最悪だったけど、ヒロのネックレスで、一気に挽回しちゃった」

鼻もさっぱりしたけど、気持ちもさっぱりとして、私は笑った。そして自分の誕生日の話をしたところで、思い出した……

「——ねえ、そういえばヒロの誕生日、もうすぐだよ。私に何かプレゼントさせて！」

「そんなのいいよ。あのネックレスは、たまたま目についただけだから」

……そう言うと思った。でも、今回のお礼に、今まで助けてくれた分もいれて、絶対に広輝にお返しをしたい！

「そんなこと言わないで。ねえ、今、何か欲しいものない？ あっ——でも、信用金庫職員の私でも大丈夫なプレゼントにしてね」

ちよつと情けないけど、そこはしょうがないよね。でも、絶対にお返しがしたい。私は隣に座る広輝の片腕を両手でつかんで訴えた。

「こんな気持ちになったの、久しぶりなんでもん。ヒロと一緒に行ってくれるってだけで、あーんないやだった披露宴^{ひらうえん}が、ちよつと楽しみになつてきた。ねえねえ、何かないの？ 私に用意できるものなら何でもいいから。ねえ！」

広輝を見上げて私が迫ると、広輝は目をそらしながら言った。

「香にしちゃあ、珍しくしつこいな。おまえ、酔ってるだろ？」

そりゃあ、缶ビール一本分は酔ってますよ。でも、広輝に感謝の気持ちのプレゼントを贈りたいという思いは心からのものだ。それを拒絶されたくはない……と思つた時、目をそらしたままの広輝が、ためらいがちにボソリとつぶやいた。

「じゃあさ……おまえ」

「ん？ おまえって……？」

ピンとこなくて首をかしげる。

「おまえさあ——今ノーブラだよな。さつきから、ちらちら見えて……俺、正直たまらないんだけど」

「……ええっ！——というか、私なんか……そんな気持ちになるの？」

広輝の言葉の意味がやっとわかり、驚いた私は、今の自分の格好を見下ろした。

——タンクトップにショートパンツ、髪は大きなバレッタでアップにしてある。久美子さんちだ

し、いつもの調子でお風呂あがりのまま気楽に訪ねた。広輝を見た時、自分の格好がチラッと頭をよぎつたのは確かだけど、広輝は兄の徹と同じ目で見て——つまり、私のことなんか女として見ていないよねってすぐに思った。

「俺、二十六歳の健康な男だぞ、目の前におっぱいがあれば、普通に触りたくなるんですけど」

そっぽを向いて、広輝がつぶやく。

「……えーと、その……ヒロ……からかってる？」

そうとしか思えない。

「だってよく、おまえ、いい匂いするし。さつきだって、つい昔の癖で、おまえのことヨシヨシしちゃったけどよく、他んどこヨシシしたくなっちゃうし……」

すねたように、唇をとがらせている。なんだか可愛い。

「ふっ……ッ」

つい吹きだしちゃった。

「笑うなよ……」

そう言つて、広輝は優しく私を見つめた。でもその瞳に浮かぶのは優しさだけじゃない。甘さと確かな熱が見え、私は戸惑う。そんな私の腰を広輝は抱きよせた。バレッタを外し、少し湿り気のある髪を指ですく。耳元に顔をうずめてスーッと息を吸い込んだ後、ささやいた。

「きれいな髪だな……」

広輝の女つたらしが、初めて私に発動した瞬間だった。

「ちよつ、ちよつ、ちよつと……待って……」

あつという間にタンクトップの裾から滑り込んでくる大きな手を、私は慌てて押しとどめた。

「——なんだよ……ダメなのか？」

広輝は、私の耳元から顔を上げ、困ったような顔をした。そして私の気持ちを測る^{はか}るように、だけど熱の込もったままの目で、私をじっと見つめる。流されそうになる自分を抑え、私は広輝に言った。

「ヒロ……浮気はダメだよ」

「浮気？ 香？ おまえ、今フリーだよな？」

あたりまえじゃない！ さつき、龍一に振られた話、したばかりだよな？

「私じゃない！ ヒロが浮気しちゃダメだって言ってるの！」

「俺？」

広輝は、意外そうな顔でポカンとしている。

「そう。だって私、浮気されて、こんな目に遭ったんだもん」

「浮気って……俺、付き合ってる女いないけど」

コイツ。何言ってるの！ 信金のロビーに置いてある週刊誌で読んだからね！

「モデルのジュリちゃんは？ この前のフランス、一緒だったんでしょ？ 私、週刊誌で読んだもん」

「ああ……あの女」

広輝は、いやそうに顔をゆがめた。

「あんなの勝手に追っかけてきただけだよ」

「同じホテルに泊まってるって書いてあったけど？」

「ホテル、調べられちゃったんだ。同じホテルだけど、同じ部屋じゃない」

広輝は吐き捨てるように言った。

「ジュリちゃんと、付き合ってるの？」

「ねえよ。ホテルの部屋にきたけど、絶対に入れなかったから。ああいうのに手を出すと、後が恐ろしいからな。わかるだろう？」

そう言われても、あんな華やかな美人を恐ろしいだなんて……わかるような、わからないような……返事ができない。でも、ジュリちゃんとは付き合ってたんだ。

「正直言って、寄ってくる女はいっぱいいるけど、わけわかんねえ女に簡単に手は出さねえよ。俺、なんだかんで一年以上してねえし。それなのにおまえ、こんな薄着で、無防備に露出しやがって。我慢できっこないだろ！ 責任取れ」

確かに私は、わけわかんねえ女じゃなくて、よく知ってる女だろうけど……

「じゃあ……私は、ヒロの欲求不満のはけ口？」

「バカ！ おまえ、なんてこと言うんだよ！」

その後、広輝はしばらく黙って私の顔を見つめていたが、やがて思い切ったようにきっぱりと言った。

「よし！ 香。——俺と付き合ってくれ」

「つ、付き合うって……？」

「俺のカノジョになってくれ」

「うそ!! ムリ、ムリ、私がヒロのカノジョだなんて……ムリ！」

あまりに思いがけない広輝の言葉に、私は顔の前でブンブンと手を振った。

「うつわ〜！ 俺、今、生まれて初めて女に振られた」

大げさに肩を落とした広輝の口がへの字にゆがむ。

「振るなんて……。私なんか、ヒロのカノジョがつとまるわけないでしょ」

「別に、カノジョになったって、今までとそんなに変わらないだろう？」

高橋広輝のカノジョだなんて重たい言葉を、よく簡単に口にできるなあ。それにしても気になる。

聞いたら怒るかもしれないけど……私はためらいながら口を開いた。

「あの……私じゃなくても、ただやりたい相手が欲しいだけ……とかじゃない？」

「失礼なヤツだなあ。俺だって、おまえに女を感じて、正直参ってるんだよ。でも、昔からおまえのことほっとけないんだよ、俺は。龍一の話聞いて、だったらもう俺のもんにしたと思って……そしたら手を出したくなって……なんか我慢できないっつか……悪いか!」

あの広輝が、赤くなつてそんなことを言うから、私の顔も熱くなる。そして……

あの広輝が、自信なさそうに聞いてくる。

「おまえ、俺に抱かれるのいやか？ 無理やりつてのは、俺の主義じゃない」

「ヒロに抱かれるのがいやだなんて……。私にとつて、ヒロに抱かれるのは、イケメン俳優に抱かれるようなもんで……抱かれるっていうより、抱いていただくって感じだよ」

それを聞いた広輝は、嬉しそうにニヤツと笑った。

「ほ〜う。じゃ、素直に抱いていただけ」

広輝は着ていたTシャツを脱ぎすてて、そのたくましい胸筋をあらわにした。

——ふと気づけば、胸筋に見とれてボ〜ッとしていた私のタンクトップが……ない！

大慌てで、胸の前で腕を組んだ。

「電気消して……」

「キレイだからいいじゃん。見せろよ」

「キレイなわけないよ。ヒロのまわりにいる女の人たちみたいにキレイじゃないもん」

「俺のまわりの女って……誰と比べてんだよ？」

広輝は不機嫌そうに顔をゆがめた。

「今まで噂になつてた女の人、みんな美人だし……。モデルとか、芸能人とか、まわりにいっぱいいるでしょ？ ほんとに……こんな私でいいの？」

『『こんな私』が自然でいいんだよ。サイボーグみたいなのはいやなんだ。おっぱいもシリコンでデカイだけだったり、下の毛だつて……まあ、あれだ。とにかくあまりにも不自然なのはいやなんだよ、俺は。自然体が一番だ!」

広輝の言葉は意外だった。でも、それがたとえ慰めだったとしてもほっとする。自然体なら自信

がある。けど――

「……でも、恥ずかしいから暗くして……」

「お前は俺の誕生日プレゼントだろ。せつかくのプレゼント、よく見せてもらわなきゃな。とにかく合意がとれたってことで、もう遠慮はしねーぞ」

広輝は嬉しそうにそう言つて、私の頬を両手で包んで顔をかたむけた。

――私、広輝と……キスしてる。

心臓が、ドキドキと痛いぐらいに高鳴り、喉元から迫り上がってくるような気がする。

ガチガチに固まったままの私の唇を離れた広輝が、耳元で優しくささやいた。

「俺、本気だからな」

頬から離れた広輝の片手が、私の背中をポンポンとたたいた。体から力が抜けていく。私は、胸の前で組んでいた腕を広輝の背中にゆっくりと回して、全身をゆだねた。

顔を上げると、広輝が静かに微笑んでいる。私のおでこに、目尻に、そして耳たぶに唇を落としていく。再び、ちゅっ、と小さな音をたてて唇にキスした後、優しい眼差しで私を見つめる。そんな広輝に見とれている私の頭を大きな手が支え、広輝の唇が、私の唇を包み込んだ。まるで、私の唇を食べちゃうようなキス。舐められ、吸われ、下唇を優しく噛まれ……濡れた音を立てて続く甘いキスに、全身の血が沸騰しそう……

唇ってこんなに感じるんだ……。広輝の舌が入り込み、柔らかく私の舌にからまる。されるがまにからめた舌は、広輝の口内に吸い込まれた。激しいキスに鼻から息が抜ける。

「んっ！ ……うんっ……」

広輝も「んっ……」と微かに声をもらした。

たくましい腕に閉じ込められて、朦朧としながら思う。

――広輝ってキスが上手なんだ。

――上手なキスって、こんなに気持ち良くて、興奮するんだ。

ふっと広輝の唇が離れた。寂しくて、私は閉じていた目を薄く開ける。

その瞬間、軽々と抱きかかえられ、優しくベッドに下ろされた。そして、下半身に残るショーツパンツと下着が、あつという間に脱がされた。

明るい部屋が恥ずかしくて、壁に向かって横向きになり、広輝に背を向ける。

背後に聞こえる衣擦れの音。広輝が残った服を脱ぎすてる気配。やがて私に寄り添い――

「香、やっぱおまえ、色が白いな……キレイだ……」

そうささやいて私の肩に手を置き、広輝は私の背中に、ちゅっと大きな音をたててキスをした。――ビクッと体が震える。

「ふん……」

広輝の小さな声が聞こえた瞬間、背中にスーとした刺激を感じた。私の背骨に沿って柔らかいものが這っていく。

「きゃ……っ！」

全身が総毛立って背が弓なりに反り、同時に私の口から悲鳴のような声がもれる。今の、広輝

の……舌？ 後ろから包み込むように、熱を帯びた体を抱きしめられた。

「背中、感じるんだな」

嬉しそうに言った広輝の指が、今度は私のわき腹をスーッと羽のようにかすめた。

何？——肌が粟立つ。体がビクビクと小さく痙攣している。こんな……こんなところが感じるなんて、自分の体なのに、知らなかった。

「……あん……うう、ああ……ふう……うんっ……」

私を抱きしめたまま、そっと滑る広輝の指。私の体は小さく震え続け、喉の奥から震え声がもれ続ける。私は自分の体の奥に、じわりとなめらかな液体が生まれるのを感じた。

広輝が私を仰向けにし、私の髪を指ですきながら見下ろしてくる。りりしい目元だけど、その眼差しは優しい。まだ息が整わなくて、私の胸は激しく上下している。恥ずかしくて、また胸の前で腕を組んだ。

「隠すなよ……」

広輝はそう言って片手で私の手を握り、指をからめてくる。

「だって……やせちゃったから……」

そんな私の言葉にかまわず、広輝のもう片方の手が、私の乳房をそっと包む。

「じゅうぶんだ。ああ、柔らかいな……たまんねえ……」

また情熱的なキスが始まった。

——広輝の唇が、私の唇から離れる。次にその唇はどこに触れるのか……

私の耳たぶに触れたかと思うと、まるで唇にキスするかのよう、柔らかく包み、軽く歯をたてる。耳の奥にくちゅくちゅという音が響く。私は喉を反らして声を上げる。体の奥がズキリとうずいた。

——からめあった指がほどかれる。次にその指はどこに行くのか……

私の乳房を包み込み、乳首をつまみ上げる。唇がもう片方の乳首をくわえ、吸い上げる。キュッと噛まれる私の乳首。痛みは瞬時に快感に変わり、体が跳ねる。その瞬間、体の奥からトロリとしたものがあふれるのを感じた。

広輝の熱い手が、私の体をなで回す。首筋、背中、お尻、太もも……。どこを触られても、気持ちがいい。でも……でも……一番触って欲しいところにその手がこない。触ってほしい……もどかしくて、私は太ももをすり合わせる。私って、こんなにはしたなかったんだ……

やがて、広輝の大きな手が、私の茂みにやっと届いた。ゆるく脚を開く私。そして——

「んん！……はああ……っ」

広輝の長い指でヒダの真ん中がこすり上げられ、その瞬間、唇からため息がこぼれた。

「すっげえ濡れてる……」

私に顔を近づけた広輝の声は、なんだか楽しそうだ。

「……だって——っ」

散々じらされたんだもん。当たり前でしょ。なのにそんなこと言うなんて——

抗議したいけど、息が上がって続かない。ハアハアと、私の息だけが部屋に響いている。恥ずか

しさにいたたまれなくなつて顔をそむけると、耳元で広輝の真面目な声が聞こえた。

「濡れてくれて嬉しいんだよ」

そして、ふたたび動き出した指が、ヒダの内側を上下になぞる。その動きはスムーズで、自分でもそこがすっかり潤んでいるのがわかる。ヒダの上部の小さな突起のまわりを、ゆるやかに撫でる指。その指先が、敏感な突起の上を柔らかく滑る。もどかしくて腰が揺れた。

もう、広輝が欲しくてたまらない。私の中を——埋めて欲しい。それなのに……その指さえも、ゆるやかに滑るだけで、私の中には入ってこない——

広輝の腕にすがって、ハアハアとあえぎ続ける私。もう、我慢できない。もどかしさが羞恥心^{しやうちしん}に勝つてしまい、私の口からは欲望の言葉がもれた。

「もう……だめ。ヒロ……ちようだい……お願い……」

閉じていた目を開け、広輝を見つめた。広輝の下半身が固く立ち上がっているのは、ずっと素肌を感じていた。手を伸ばし、そこに触れると、熱くて、大きくて——それが欲しくて、はしたなくねだる私の目に涙がにじんでくる。

そんな私の様子に驚いた顔をした広輝は指の動きを止め、上半身を起こした。

「ちょっと待ってろ……」

広輝は、少しかすれた声でそう言つてベッドから降り、バッグを引きよせて準備を始めた。私は、その間に乱れた呼吸を整えた。

しばらくして、広輝が私の隣に戻ってくる。ねだつた自分が恥ずかしくて、その胸に頭をすり寄

せ、抱きつく。

「可愛いな、香」

そう耳元でささやくと、私の膝を開き、上を向ききつた自分のものをつかみ、私の中にゆつくりと埋めていく。欲しくてたまらなかつた場所に根元まで押しこまれ、私の突起が押しつぶされた瞬間、体が震え、頭が真っ白になった。

「ひやつ、ああ……!!」

喉から嬌声^{きやうせい}がもれて——声を殺すことができない。

「くっ……!! いったか——?」

広輝が苦しうに言った。私は、広輝の腕をギュッとつかんだまうなずく。

広輝は、ふうつと息を吐き、私の髪を優しくなでながら、ゆつくりとキスをする。

「おまえん中、気持ちいい……」

とろけるような声で、私の唇の横でつぶやいた後、広輝は私の下唇をくわえた。私の中がうずき、広輝をキュッとしめつける。

「おまつ……待って。俺だつてけっこう限界なんだよ」

広輝は私に噛みつくようなキスをして、大きく腰を動かし始めた……

「龍一のことなんか……あんなヤツのことなんか忘れる。俺のことだけ考えて、感じる……」

もう、龍一のことなんかすっかり頭の中から消えていた。皮肉なことに、その言葉を聞いたと